俳諧正語抄 全

中村俊定文庫
文庫 18
824

能く見きはめ人なし

舟よりの秋乃色

長翠社　井華庵

俳諧正語抄序

東京山外

中村俊定文庫

此一巻を羽黒呂丸の彫よ作へて年久しく深入て
亜のもとにうもれをを亦谷の湖山取出きたり、
予ら若き頃父なる荷曉よ入せたるを返し
見て曰ふる越中の国よ人り名をうき浪化公は
漫筆ふりて祖翁は正語を挙て世正風沢乃
意を示さ給ふ此巻の題を乱と云へ
るも〳〵正風を名も心の正を本〳〵て是れ

俗ふいひ出るまゝに儒佛神の大道を皆
同しうるく俳諧の元を示さるゝやう
もとれく曲節紙毋にあらぬ姿を虎巻もて
を出るとゝろひく到を教示されるへ
汝等をあきんの駒よ鞭打く千里の幸さく
を思ひぬ邪路に迷ひ罪を大海に陥りて
正法よるとゝを知らいて生涯の俳諧を捨
んやまれく寔に心をつゝ発て今日の俳諧も

樂へしゝ試書れり未待ふ打てちむも
をく且を猶り樂人に出ふ不しいまとた
のしき庶くハ梓小彫て同志の人くに送る
んさいはへおのゝ好めるもちて家の有をもて
ひさすふ物せんを家訓にもむくへ家れを
時の至るを待へしゝ発て明るをもとゝぬ者ハ
汝よ話を爲しゝ早晩上木して我二思るを向よ
ひつゝ出なる集なる号て発句附句のいとぬ

鄙の戯言を梓にして他邦に鬼寧の小冊なく
ならしよせられなんよりゆきりぬへしさりとて
かなしき以そくへおふしき書をもいふおとく富
貴に素してくハ冨貴を行ひ貧賤に素してハ
貧賤を行ひて只そのさりくの優游に於ひて
物に意着もなくあつれしわいくほと
なくて身ゆきりぬとも自もつとめまハなれやそ
何ふれと世のこと業をなきふゆきされあなかなふ

是君か川をて子くも二十七回忌にあたりけれく
ここに同志の社友ふたりまよ語らひて共に
力を助ある橋店の便りを求むある人のいへれは
出羽の急去られけるは人々珎しきとも思へへ
又此大邦にさ梓にせまらんよ爾なきてあらさ
ともやさしく小理り写すものから今此年忌に
あひて諸子の志も同しくなりも耳順なる
如れハ此筆なりともいふへし既にその

人を池ち笠の用ふをせよ　つゝまかれ助
少もうゝと父の業さ言ものむるゝ
ひつ[illegible]笠の寸忠ゝもるゝめゝて家鄉園れ
窓下よ其よゝ山さゝゝ書つゝめゝて[illegible]
かゝゝときひさちの祭りる

文政己丑れ春

俳諧正語抄

羽鶴岡

泉鄉音園琴而校

芭蕉翁を昔伊賀の國藤堂の家よ仕へて武と
以て業ゝせりさるを忠の為よ録を捨義の為小
髻を落ゝてより佛頂禪師よ志さうひて禪り又
熟ゝたり其始を桃地黨の姓松尾氏ゝて抵青と
號を深川よ住庵をる事既よ久ゝ窓前よ芭蕉
を植て春秋の栄枯を訊を世の人を芭蕉庵

の翁と呼翁も又其名自然うる事を賞して
こゝろ芭蕉こゝを名乗たまへる翁若き時より和
歌とよく世の季吟を師として武江の素堂を友
とし其一夜秋雨の蕭颯たる空淋覚え　をせ試
肥分して盥に雨をきく表小と此句に庭中の
芭蕉を拈却して我号にこゝを得たり嘗禅師宗
茶話の詞あり曰道心を求んとする者若市中
の喧忙に飽て幽谷に隠れん其初に飽るのハ又其

終に寂寞に飽んされとも今日の是非に交りなく
ら其是非にはなれをして自在に道を得んあらゝ
此俳諧に拠んて名利を厭んこゝろ一と此故に
禅と和歌とを合て今の正風躰の名を得給へり
故翁世最の句を多くハ皆観相の句也
正風躰とふ事正こゝを其本心也風こゝを姿なり
幽玄こゝを我吟魂の拠ふ所なり我本心の正直より
是を姿に拠ふ所あらはせ竹の一葉の風

と飜して萩の下葉れ露と裏してさくかるの糸引
夕雲より見小舟を物とする逸玄として平生
よいとるのとあくる業と小も一ッとして他道よりら
ぬをかく禅と一僧問曰何なるか是佛性荅曰芦
華半輪の月此一句幽玄として正見の人なら
をんいかゝ永法身の佛性を知まゝきや又問何
なるか是平生の智荅曰長床と飯あり粥あると
此一句平生心なり只風雅を正直なる紙な意と
て唯の人れをゝの事いふを佛道をいふへゝ涅
槃經をを平等心是菩提とも見えをり
風雅をを人せわなるる天より得なる百なり此故と
愚なる人をふとおのつから花を愛ゝ月を眺
事を知れり哀せん時を能く倫を知け世の人
情と通達して雲井の憂ををりて七食の樂紙
をを近来ハ他道もまちゝくなりて利家心て
あゝぬ偽をかなり曲節と號してあゝれ他言を

好むより故翁の心意に応じ道徳に志の人多き
を憂ひて翁も他郷に古人多くを欲きたまへり
詞に花を飾りて心に實なきを唐人も誡めそし
巧言令色多辯を君子の大に悪む所なり常の立
交にも言葉の巧なんを嫌ひ多きいたに
むつかしき辯舌ハなるさに事なるや曲節とも云
事古来よりなきもいとに一巻ハ円二三ヶ所
なるもあるもあるに其前句て

なりておのつから生なるもれ知へし音曲の節ハ
くせくいふも一ツくに曲の有ふもあるに他郷に地
といふも同一心なり唯流水のごとく安らかに成就
才一くせり一巻の骨肉といふるあるを其動静
緩急を見てかふ事なして表裏といふを禮なり
序也序破急也發ハ人の許へ行ときに前庭より
堂礼なるあるへうるに終表隅に同れかさ
なるなるを礼の和なるもれるん浮世のさるあき

数くもゝ慰んこゝに関まゐきうれ是を表く
いひうらゝいひ名殘ゝ立帰るべきさ自ら放逸
なるゝんハ禽獣の交るゝ〳〵さうなおのく膝を並
して序の心を立ゆゝうゝて意うれ此故に俳諧
に禁句を別句慣ひ重し〳〵
發句に始中終あり始終の句法あり故翁を始
中終の句ゝり中ひより始終の句法に取扱へ始
ゝいふを上の五文字ゝて天ゝり中七文字を人也

終ゝゝハ韻の五文字地にかゝるを
發句の心得を月花を愛ゝるも念着ゝり事
なれ飽まて花を惜して終ゝを白雲に心を残ゝ
るゝるゝ也是を一句の變化ゝも俳諧の〳〵ゝもいふ
成へ〳〵風雅ゝ理ゝを各別ゝ知へし蛙ハ　雉のすへ
雉ゝ蛙の落此句雉のゝく雉ゝゝいふを取ゝ
て下部の口ゝも云出ゝ蛙の落を風雅ゝて
作者の骨折雉也かくのゝくゝる附一言一句に

して茶道多分まぬかれ
切字のみ古来より十八字を定むる説もあれど
蕉門にも曾て其さだめなし切を断せといふ
意まて其意を切其系を切といふ事也意の切
口合の切といへるは是等もおのつから備りぬ
知るべし中の切といふを五七五の間へてふとを
入るるべし挨拶切といふを庭句のみ文字に
能動くをいふべし

發句は其位の備るとそなはらざるを分別をへし是
死活を定るべし題の象句奇仙百韻の位差
別をへし頭の縦横といふは縦を竪なり昔より
和奇を用ゐる花鳥風月の定むるといふ也横とは
麺棒摺小木の俗をいふ式なる花鳥風月を俗語を
もして疵付るなれば也横を名列りて洒
落を和歌も任へしと義
服を主の意とよく象句を對し兼の應をもり、誠

よりて各別に挨拶の心を用ゐる所も及ハ
ず三を搏句也前二句内外動静を見定て変化
せるを一ず三始りとなハ象句ともあるに平句ハ
あるに能く其姿情を辨知へし留りのるいつれ
ども上へ廻りて時動せるを不留知へしされハ
ホてらんもれ一ホ古来より定るる所系の殘り
なるを用る也ず三を搏て上五文字を一句の全体を
ひるへし是を上五文字に重き字を用る故あり

四句目古来より殆く搏るるいふる第三留りに
ホ系の響をうけ是を四句目に引る故也各別
句意を揚る事なられを
五句目を一巻の緩急に定る也全体此一句了
究るを知るへし
六義の事風を其國其所の風俗より賦を
見る所の風系をありのまゝ正直に出る也
比を掛にまぎらへて系思ふをうれを事

興ゝを月花を見てうかれて心中のうを思ひ出る
るを雅ゝハ正也徳也聖人の徳をうゝひ頌をう
かゝて堂徳の人間へうゝ頌ハ三人の徳をうたふ
唐ハ色を以て宗廟ゝ献ゝ佛家ゝ色を頌ゝゝ
一句を以て人を大悟せ[illegible]をいふ也是又常の人
れ及ぶまゝ
三十六句を婆婆の現想をたゝね一句ゝ三界遍滿
の念を説く其現想ゝゝハ五倫の情ゝ通達して

其ゝのゝれを知り智ゝを知ゝを以附合愚ゝを愚を
以て防ゝ時ゝを弟端背くゝゝ富貴ゝ居てゝ
富貴を行ひ貧賤ゝ居てゝ貧賤を行ふゝも
人間の盛衰と辯へ知るゝゝゝ哀樂ゝも又若
ゝゝゝゝ其日其時の俳諧をゝり一日の変化自
在ゝて能穏ゝ言ゝ一生の俳諧も能ゝ誤る
るまゝん
大節ゝ臨んでも能本心の風雅を守れゝ死ゝ臨ん

ても又よ寒さるなん死ハ家風雅の絶えれ
ハ其風情を忘れ盃るに風人の常の楽といふを
天地の変化人間の盛衰なれハ春秋ハ栄枯よ面
白く人間ハ盛衰よ感慨あり人生れて死せぬん
ハ更よ益なし老少不定なして無常の迅速な
るこそうれしされを死の至来せんる我人面
白の外今やくるる面きと思ひよりさらよ物ら
くと蕩去の夕よ至へしたらく昔を顧るよ

明日を今の迷ひとなり今日を又明日の為て
迷ふ悲と楽と往かるひて止時なし限ある命
を以て限なきるとをたらるを皆妄想なして是な
る事一つもなし杜少陵ら詩よも人間万事皆非
とも又士農工高乃隅もなく又を宗旨の撰ひも
なくそれくの事業をいとみるる心此風雅て
達して浮世の是非よ念着せんして名利といふ
菩提の心をも求よ迄後世とも遠く尋求る

も及ぶ今日座臥の中に在りて唯風雅の扱ひ
一ツにて悟入を企きるなり蝦蟇荷葉に上りて法華
を講ず蜩蟬黄樹に鳴て正覚を唱るといへれ
意を知らんに松風も水の音もあるに関るさん
口に観想を言つゝあるゆゑ婆婆の中に心の
満足られい貪り望るもなくなりて変化
理に踈るゝ世常れ迷るゝを離て探去も
意離るゝ詩を志るゝ釋して其志を述る

の事やされハ其念のおもむき善ゝして他の妄念
妄想の生るるなれハ悪趣の種もなくなるん
詩を三百篇なれども畢竟ハ思無邪の一言に
尽るなり
問曰如何是拈華微笑の一句答曰思無邪又摩
訶止観なる心に観られども心に著られハ邪ともも
見えなる風雅の大事に於いてハ志も心に著せ
ば又善みも著せば悪にも著せずして其大道に

至る〳〵迦禅ゟ山居の僧を問曰汝入定の時心何
処や否若有といへ〳〵蠢動皆入定り〳〵無ゆ
いへ〳〵草木皆入定荅曰始の入定の時有之の心を
見んと又曰有無の心を見んもむと何を此山中ゟ入て
行動ゟ若〳〵む見則翁の是非ゟまゝ道了
拍手ゟの大なるゝん
翁一日嗒焉〳〵て柱ゟ倚て曰風狂ハ鑿ハ浮へ
る雲のゝ〳〵風ゟ隨て一回ハ皂狗とゝり一回ハ白

衣と成て共ゟ哀止る所を知ゝん是去来因縁ゟ
任て俳諧ゟ生滅をきるをいつり禅ゟ僧来りて
礼を問曰面前ゟ立者を何人を荅曰風ゟ任て
来る風ゟ任て去る絶ゟ見ゟ示〳〵て曰了々〻〻て
不了々道々〻〻て不道々是則不住の所也又
孔夫子の語ゟこれを用れを則行ひこれを舎れハ
則藏るゝあり去来因縁天命ゟ任せたる也人
多くハ俳諧ゟ法りれて俳諧ゟ著る所ゟ見ゆ

以て伎藝と覚え人よりてうやほめられて名利
よりも却て邪智となり他の是非を謗るさか
意あり人よりそしられて更に益なし他諧大悟
の後速に他諧を忘るべし他諧を知りて能人情
に通達し是非にほうれちして変化自在なるを生
死も又安らん禅に所謂生や雲に似て集る死や
水に似て逝るといへるは則風雅なり五老井ハ
没期に　下にもたり死ぬるまでと思ひしに上

よりも死ハ糞上にもせと尿糞の壺をあ破して去り
晋子ハ　蛍の暁さむしきりくとすくに雲
秋の栄枯に一生の速なる事を知り小枝ハ　書て
見るり消しるり果を苏るの花と一生の虚實
往来も此一句に及ばず消し果てもけしの
花のりろきを風雅の人に掬るん是等の人を
死に至る迄て其風雅ハ既に勤ることをへし
翁或ハ其角を誡て曰己ら長に知らるべる人の

旋を云へるなり　物いへる唇寒し秋の風　此句を
得て其角一生他の是非をいふなりとぞ
俳諧も唯思無邪也禅も無思悪無思善是
佛性なりいへり世人唯狂言綺語なのみ覚へて
風雅の本意を忘れ或人問曰何を俳諧の徳
約まる敢り小苔曰此道に至るまでは一艸
一木をも他に見るべきあまく生ずるなり
心に琴りそれ苦楽を辨へ人の心を己が心とす

君の心を以て吾心とするをいいて不孝不義の
者あるなり　花の夕れ霞の朝乃蜻蛉も心を
通して其哀れを知りてよく朋友をむつまじかり
孔子ハ信ありとのたまへり　他の心を以て己が心とも
なると曾子も忠恕なりいへり佛の教に大悲心なるを
も哀れまるるなり
風姿風情なるを心なり信なり風姿
體物に感して口ずさみ詠まり風姿とハなる

也されハ唯口よりうたをつゝめるも本心誠
なるもんハ偽なく邪也人〻て信ずけきゝ多
法よむなり其心よ真あるゝ神も佛も感應もゝ
きうり意心の風雅句よ顕して姿ゝるれハ風姿
風情一新なり情も天理なり其本心也るれハ句も
亦也り其情変曲るれハ句も亦変曲るゝん故よ
句作の正也るゝとを意ゝを教るなり何て曲節
をなへるんや

一巻の運ひ抑揚頓挫ゝゝハ四季憂およひ雜乃
連綿也天地よ陰陽あり山よ栄枯あり水よ浮沈
あり又人よ動静血氣ありて一身自在流通せるゝ
めり又壮老よ比して句といゝん壮ゝん衰ハ也
よ花やゝん老をむゝん衰ゝを哀憐閑寂をもと
して物さひを要ゝゝ
戀よ上中下のさゐあり物形あり其幽賓をもゝ
されハ徒ゝるゝへしある法歌よ　樂しゝハ夕歌

栅の下陰に男をてらす女を二布して又　男と
ハ汁うけ飯を食さして折箱添て出さをそのゝ
かくの如の姿を俳諧師にして正直なるハせる
なる面〳〵鬼幽霊化物狐狸の類附合跡をさへ
〳〵見苦怪力をして語へ〳〵動揺して實
を取扱ふハ己其化相を迷ふといふへし
釋教の附合殊に大切なるへし能〳〵大悟さへ
前句佛といふんを小善の功徳を以て附る時ハ実を

佛意を知〳〵さる成へし　問曰一切藏經功徳ありや
答曰世功徳又曰何ゝ故ゝ供養を答曰汝有
眼なるゝ故に又一切の義經破古紙をもいへ佛法を
唯世にあり

松風をうして深しき秋の月
終佛をなをなるなれ
是白扇ゝをうて替れ菜のめ

是等ハ附合にて大方工夫をへし松風に喚れゝ

ら秋の月を詠る一念他の願ひのなれハおそらく
其心まてをハ〳〵ハ佛ゝゝ彼を志めして附るゆゑ
三句目ゟ平せゟ取るゝて志も其念一変を附る
なり不用不捨の附合るゝふて有ゟ着るゝれゟ
世眼を以て是を捨世ゟ着るゝれゟ有眼ゟ
て是を取高ふるゝれハ是を抑へ退くゝるのハ是我
進め捨るゝを拾ひ用るゝと捨つかくのゝふくるゝふ
一巻の俳諧有世の中より出て念着をるゝ畢

竟ハ今見是非ゟ執着るゝきるゝを第一と教へ〳〵
或人の曰蕉門の俳諧を何の為ゟ作るゝや答曰此
俳諧を以て心自在ゟ修行られて今日世間の通用
ゟ宜く遠くハ佛性ゟも至へ〳〵ゝ世間をゝんる
ゟ唯我とゝふるのゟおゝらて五欲ゟをく盛るゝ
其愚るゝ者を金銀を貪り中人を名をむさぼる
上人を徳をむさぼる是皆変化の理を志らさる
故ゝ為物始終ありて常住成るゝれ一ッも是

春夏秋冬と移り変りて六十年終に二万日にも
及ぶ流湘日夜東流れ去りて愁人の為に留る事
なきがごとくなれど限ある命を以て限なき世をむさ
ぼる事我ながらおろかやうの事なれど念
強悪に凝り加へ染りて適善をなすとても善に
うつれる悪と知りても離れ得ざる変化の理に
疎きゆゑなり形を煩悩の為に得られども心を本来
虚霊にてうつり移りやすく儒に

是を天理にも本性にもいふ禅にも仏性とをしへ
神道にも神明の本体ともいへり風雅も其本体より
流れ出て真にかぶれば万法に通達して其理に
背くなかれ人間一生八三十六句に終に知へし三
世も尽くるべきのみにあらず今日を現世也
明日は又未来にていやさき死も知るべからず今
日の哀楽に忘れば怒り服立るは此世につ
うまれて仏にも苦しきを家にうるるの因縁をいと

ゆへしか此なからん時ハ明日も又かくやうなるまじきに
交りて六ヶ敷時ハ左に向ひ右の過去我忘るへし居
而起而に皆過去有現在る十界ハ我一日の行動に
して皆具しけり出る息ハ過去也入息ハ現在なり
出る息の二度鼻の穴へ入にきあらし念も又我の
なしされハ外より物の觸来りて動きるゝ者も
も心を動かへからん莊子昔江淮に船を浮て釣試
樂しまんとする時樓船の漂ひ来りて其船に衝れ

て既にくつかへらんとするに莊子怒りて鋒を揮て
是を見るに彼船に人なし風の自然に来る也是
より虚舟の二字を得て終に怒りを去りめる人
を以て虚舟とゑし風のごとく無心なれを更に
逆ふるなからん喜怒哀樂ともに久しかるへからざ皆
其始有終あり物く其始る時にむかく其終を悟る
へし進者ハ必退く盛もの速に衰ふ樂にあふ時ハ
たのしみの娑婆へ生れたりと観し苦しき小居る

附き今しき姿婆へ出でうと欲をへしまうみ
時く剃くよ流れ去り風雲心よ吹くも絶よ又静寂
況や有情うんを久しかうん
俳諧をあるうちよ口よ唱ふるものよ心よく
此乃よ達し今日は人情よ通達して是非変化自
在なるハ一句は他あるも高声と翁をのく
俗へ言されたるへ口よ今言妙句を他と出しも
不慈不孝まして己が邪智よ不ことを物の辯も恥く

物の喜れも知らし己が命しに捨て死う見を物い
まひうんよの名聞よ乞る小軍を楯の下よ卧うる
犬の蚤の色香を志らさるよ等し一日は我行動ハ
皆俳諧と朝のむく起よ見とうるみうう元の雲を
詠めて立小便をいうよ世意の義白ちしやや水よ
臨んて口を嗽を洗てかうへの樣花よ目の涼
しきを不易の眼よあしやされてとて終日外よ
立面へきよひうへ莚のよよ祢まりてよ器を

小樂しきハ者三の変化とかくのぬくもれハ一日乃
我事業乃有非乃有てもも其見非乃迷ひ
して俳諧の首尾を絶るへし或時其角ら句て
足あゆる亭主ようとも彩酒小翁此句を見て汝も
既乃風雅の魂を得りと吳たまへるよ其角ら
生質唯句の曲ある事をぬんてさひしき念ゆ
さるよ巧言を捨て云ふの平生乃為れを行末
たのもしとゆるし給へるを老井ら句乃 十書乃

も小粒乃ようなる秋の風此句を関て既乃俳諧の骨
髓を得りとのるまへるを見ハ家智乃ようなるして
風情の寂しきを養たまへるを 蛍もなき馬の尿こく
枕かな 道の辺れ木槿を見るよ詫れり此二句ハ
翁の作ゆて其場其時の自然也唯正直ゆて
更乃曲なし家乃風雅の信有時ハたゝく士ハ奴乃
ちゝゝも其君と限るに変化の俳諧ゆて志も
忠義を守ゝ云へし能此念至れハ士農工商ゆれ

くの業を除うゝに勤を已う盡まして更に倦る
なゝん六祖の骨折も確に念のあゝたいふ大悟も
へきや心青雲に拔んて三千界に渡るへゝ倫の
禮に備りて死に至るまて堅固うれと是非自
在にして非道うるゝを望まゝに玄來因緣に任
せるう所に是を俳諧のるとハ云るゝ
一翁の常に杜陵の詩の伐木丁々山更幽と云句を
称してをいゝも此悠遠に到へきものたまひ又長嘯う

一奇に 通出る燒物〳〵紙に嵯峨かり咲つゝしに奇を以て風色を是に寄へきものゝまゝ むさゝ地八月の入へき山もるゝ
茅ゝり出て茅ゝそいれ此下の句ハ理屈みて
更に風雅ゝ尾花の末にかゝる雲といへと
風雅ゝて理屈ゝそ是等のさひしくゝ
辨へ知へゝ
翁昔肥後の山中に越あに附て十ゝゝ月比男乃

それゝ婦とおかゝ〳〵きゝうりゐ蕭をとゝろして坂中
よ休ひ居ゝり女ハ男の若とゝゝひ男ハ女といさ
る有箱をくよりて云こゝらあゝりの人ゝや大義
よゝそゝありそれハ男のいゝる賤ハむゝよの山れ洞
より日毎〳〵夫婦蕭を負て城下へ賣ゝり
其日の糧を求て日暮れハ洞ゝ絶花佛恩を悦
ふゝ他の為もなく山中よ労ゝ時ハ是とそし
空の雲を見る山樂〳〵き事ハ箱も知たりふゝ

といゝて箱此云為にめて孤ひ門人ゝも物語られ
るさハ富女のゝやひやゝるも妬あゝおそゝ
く傾城のゝつゝきも偽ゝちゝゝゝ口惜ゝる〳〵
中〳〵賤の女よゝそ誠のゝりゝき妹脊きあれを
いよ〳〵感〳〵ゝ行へゝゝゝゝん戯ゝよゝゝ似れと
ゝ新き孤ゝれた書付ゝるよ〳〵古き書よゝ入へ行
箱一ゝせ毎月ゝゝ陸奥行脚を強て越浜へゝ
つゝれゝるゝ壺江の津とやゝんゝゝ石のある寺ふ

立寄て此寺より知音の人に添書おこうとて宿城
を出るに旅の疲れ公立を雨風に吹破られて名
残もあるなしかりしと主の僧拍張に窺入て
よしみくや思ひ入宿かりきよしやれば箱行
るき風情にて佛前に一礼して立出るに番僧
も引とめて俗諦の上手なるよし爰にたへ
ぬ望にあへて箱安き間の事なり笑ひ
て書付るる数多に及ぶ首良大きに腹立

しく引立まいらせるに首良の中なるを涙に時に
あれ秋の日はいと短く山の端近く暮かるに
宿借をへくもるき所に用の振舞よりて
腹立なる時箱門前に石に腰うけるに首良を制
して云た程の心底にて八幡殿の一筋も覚束な
くに初思ひ立めるに日に行まれ木の下も一宿を
ぬし因縁に任せて行脚をへき覚悟なるにやか
る折にそいく佛説の言恩もいるとまれ姿婆

の哀も我身よりあれて佛道の大道まさに入るき也其
上宿世なりしの心と教句望める修達の心と人
も心も名別なり大節より編んて森へ〻ん造次よ
を能〻顛沛まも能まるとそ見へ行れと杖引
なり〻立出て折〻竹風といへるもの〻留め
ま〻せ草屋まも休〻いたまへよいへ〻名れハ箱日
出志有〻〻いへまも流伏も有る方をむる〻く
るてかよ一歩を明さんもいそれう俗〻〻見へ行れ

迚もなるへき筋なく〻ハ始の主れ軒のたまゆても立
ぬ〻たきよ〻ゆされる我仏風閑ていく〻安きる
也幸我菩提寺をれといふそもとゆさるひる時
石蹄の水とまつ〻〻汲うけて足なんと洗ひて佛
前の側よ安座〻活へ一間の次よ曾良と畏りた
るまま恐尋常の人とも見へさり〻ともこ此歩住僧
恥を忘れて扇面を出〻箱よ讃をも〻時箱筆と
りて 開三寶是三界置一本唯一心 涼しさを

たくいつまでも忘れなよ

文月や六日も常の夜

まさに似たりよの句も此附うるべし奥羽の行脚より

蕎麦を供し給へるを蕎麦良う中賞とたべきいまし

同ましろいいさ白岩頭より倒れ死んよりたやすく

いいたやくして去留ふ所ふさうろうさる彼う勇行

るべたのを給へるもや

始翁を毀る歌たるやうも彼是ありされも絶よ

を已くう方より便求て慕ひられ恨を忘て其人

を歪くしちるを給へるよう翁俳諧を勧て絶よんん

うんを忘れるより此をを達し給へるるん孔子

此曰る歪を以て怨を報るいふるべし今の人俳

諧の利口を以て却て邪智とする学風の人は

あるより他の善悪を論して人を笑ふ此所よ変化

自在の境に至りて以後速よ彗俳諧を忘るべしと

翁新波津の旅泊より病の急迫られ門人の誰彼

地築りて良医を求んとせちくるる時翁枕を挙

て曰「死生命あり富貴天にあり人力如何ともなしがたし」
らんとて妻子眷屬にあるを殘りの後悔を防ん
とおいまく命をもとめるりあるん事をおもうべし浮雲
流水の孤客仏の為に命を貪んやわが十年婆婆の
俗塵を捨て霧命今日に至る幸なり我一生の俗
塵も紅塵も今日死の一大事を能せん為なり我
風雅のかなりに至り今日より業を捨て臨終を守る
べしとなつるを聞きて「旅に病んで夢は
枯野をかけ廻る」といふ一句に一生を終りたまへる哉
辞世のやうに心得るべし人も知るべし人
も死るまて父母の恩愛を忘れさるを孝子といふ
「今父母の地を新まて旅に終る何て父母を思
ひ思ひ給へんや
「翁西國行脚の時二度古主にまみえて「さぬきれ
ものと思ひ出を残る此句を奥の体にて花いむ
なる人の添離恨変の有様を新しくいと

哀れ也　稲妻よ悟りぬ人の弓矢此句を我が見
のいとめ〻り也石火電光を移詰〻と死の火急
なるを大悟して今やの時も覚悟をて力のを
たんをうつき振舞也あれよおそやるるん
こそ風雅なれ稲妻よ張弾ぜんハ力のありて
まこの正見をいへ〻ん稲妻のりろく哀れを
て淋〻きて見るへきを正理也たく〻正見をるも
形脱却せるる初をいはる火宅をのれ眼光落脱

乃ち心の正見をやいをんん
道を自在よ至ておよりを来るまあるん其人然其人
とをる寶積禅師臨終の時門人の悟道を試んと
いへ〻共時普化和尚未府より起て筋斗を打飜し
俗るを云をんかへりのる也是何ぞの面よ悟りありや禅師笑て普
化よ附屬ををいへ〻
箔せ涯五十余年花實一朝の嵐よ吹れて爰の
こ〻泡のめ〻せ蕚の心よ任せて都の花やるる地

をさけて又る人も多き本願寺より其遺骨を納り
没後其所々より彫刻する經典文章抄を許六に賞
求て煙と燒うしなへ其餘意をきき思へ
流散て彼をよし是をあしと愚昧の口小評呼
せしんを口をしるせり人去速より跡をきえよと志
しるして徹より翁の志を能志りたりと誉へし老子の
語に上德を德とせず是以德あり下德を德と失
はずして是以德なし云々是大德を志るもの
者も有し今の世の人とて俳諧を以て却て名
利の種とするは故翁のお意にあらずかの人
を終に其大道を志し俳諧を藝のやうに覚て上
るを下るを批判して其心の至るいたらざるを志し
其名を世に人にもて敬れて一座のよに高ん
とおもて家門人とよび物を記し巧言令色をもと
大欲は道の罪あり忘るべきの至極也
故翁は最に七度の変化い前にを他の業に挽拙

とぬんとてあるべし門人のもの法一致にして念
着をもて所に変化自在を導んと初て俳諧を若悪
不二門を非によりかくのごとくするを示す後人誤て悪をか
しても不二門とゆるし学術を能にして是非をかく
べくもの事とおもへり天地懸隔也舊来の悪に着
をくべくべし速に若に移の事をこそて悪を不二門とも
捨たり猶ハ僧来て問て曰に従来の罪ありや懺悔
せん若曰汝ら従来の悪と尋て提来せよ此心ハ一ッく

其悪をもて提て持来れるもの其罪尋るに不可
得頓に大悟を示一僧来りて問曰に罪ある時ハ是を
佛に懺悔してまぬかるる若其佛をもて潰さんに何
に向て懺悔せるや若曰後也尚来の悪を以て不
二をも許さん

俳諧猿蓑炭俵の二集を俳諧の古今集と称して
風姿此二集小笛ばりさるを曲節をなるべして二集の風
姿を古しるといふる歟を故翁の俳諧を破却せるの天

魔ゟり其罪許さ〳〵近比の俳諧と云ふる風儀ハ
語ゟかまびすし一句の彰しさと云ふてひさすら曲
節とぬむ弦ハ屋風の亜うるハたゝと逆さゆゑ立て見
と彰〳〵〳〵五器の尻ゟて水と飲庵下ゟて味噌も
さ〳〵雷木ゟて物ときさんとする歎順と捨て逆とき
る形のゆく成行時を俳諧の五箇八躰ゟ事近比を
伝授口変ゟ歸して價と取て見と許さゆゑあり其
罪少うゝ故箱の中ゟ前ゟかゝる法と国比俳諧上る

ゟ至れハおのつゝ傷るゆゑ也五箇八躰の外ゟ別の附
方ゟ出る俳諧ゟあゝ比俳諧ゟ
て後ゟ定る名ゟ知へし
近来殊勝ゟる形聊ハ入ゟ適ゟ多くハ俳
諧の糟ゟ酔て只放逸と風雅の大道と見て理ゟ
て志も貪る意涼〳〵かゝ家軍を艱難と絶て見と浮
世の絶行と覚されハ嬌慢奢傲の心の〻盛ゟして呆ハ
他のゟあまて解歩行事と行聊ゟ覚たゝん昔

和及法師のいへる世俗の行脚行乞くまて蕉門と
号し翁と冥暗の罪に落さんすいて口惜し我も生涯
行脚の思ひ絶さらんゆゑ事也
昔西行梅尾へ参りて明恵上人に礼をすると上人曰
西行八世に関及る殊勝の道心者なるよしされと月
花に心をくるとて狂言綺語の和歌のみ好ならんかを
ゆゑと宣ひける時西行曰尤なる行ふ所歌ハ皆
真言なりとひやされ上人もと合て誤を感し

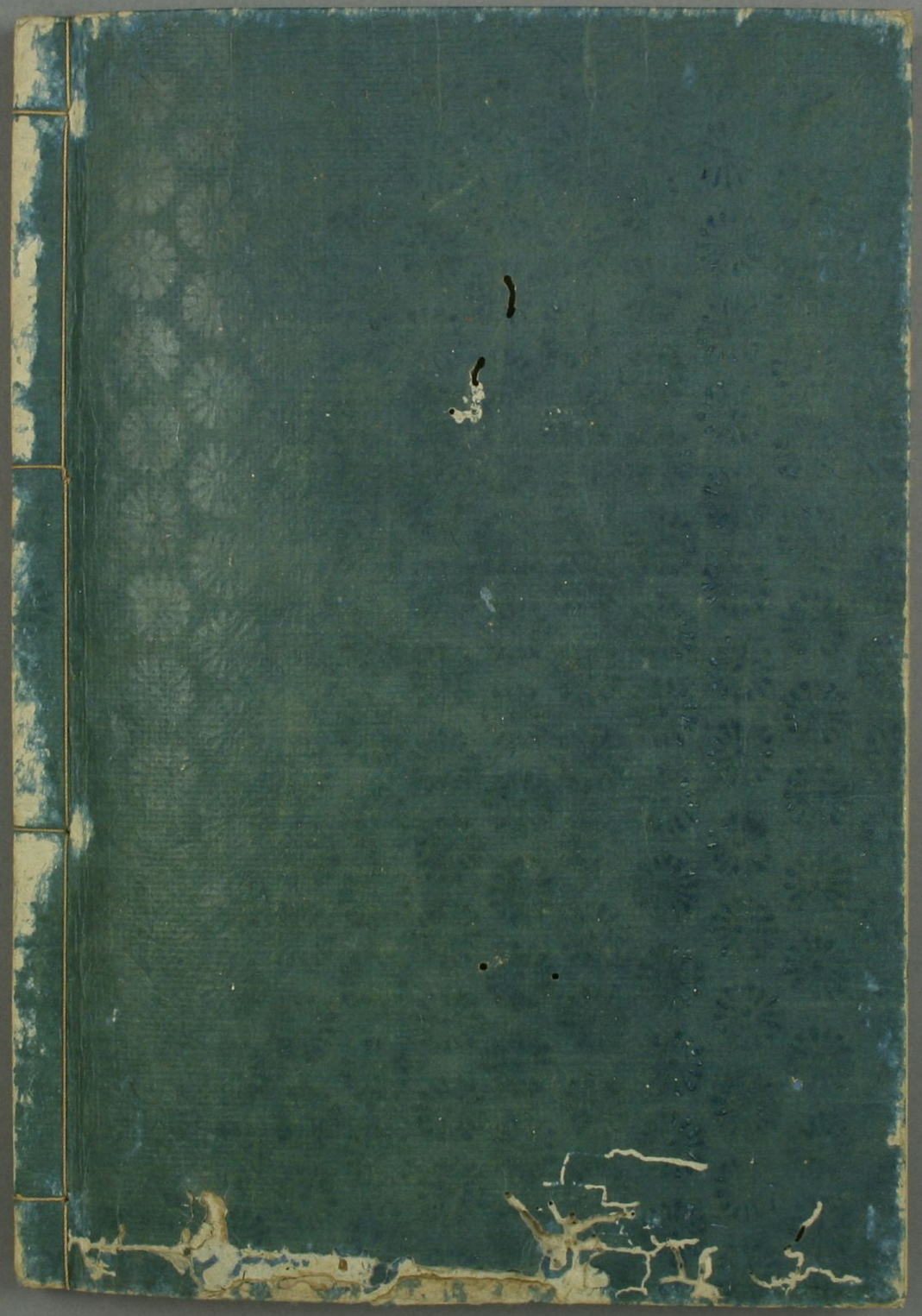
強へるよし然る人いふ行ましてを新や
兼好法師の奇に　友なるぬ人の訪来て長居をハ
ものうるあるよりさひしうらるとなん我に引くき
風雅の友なき事を歎き強へり畢竟を物言へと
むつし唯口を閉て心に雲外の友を求んるをもし
彼法師の言葉も誉る人毀る人ありふ世にて面
らに関人又速に去へしと人に悪せよとなるあら
ひ名をむさる人の為ふ今世人他諧を時く

のちやうさに成ぬるを道徳ようときうあ
成ぬ〜鬼も角もいつ同よいつも世常の風吹雲り
て死なさんされハ死を以て風雅の終といふ時を
死して後名も徳も更よ益なし〜皆妄想なり
跡なきなり〜此書も見去て後紙屑籠よ納て
果を油去器の為ニ渡犬の爭ふまりて迷ふ去迷

故ニ法華経ハ本因妙ニ来ル形
うゆるなり慮ニ山人佛學のいとまを傍
舊門の俳諧ニ遊ぶ其世俗俳諧ニ志
を新ぶ事もとしもとれをこそ世
ニ乗ぬ事ハ俳なるまて此撰あり
ケ〜さわ事思ふ邪の西語り
ふわ明有毛の曲 說ニいとひ

[illegible] 祖翁[illegible]
[illegible]
人[illegible]
[illegible]
[illegible] 仰[illegible]

男文成跋

長翠社
井花庵
大洲茂樹

蕉門書林
皇都寺町通二條
橋屋治兵衛梓